

# アチエの子どもたちと再び 演劇や詩の創作に挑む

—インドネシア「アチエ子ども会議」の試み

はななき せつ  
花崎 攝  
演劇ワークショップ・ファシリテーター



ナングロ・アチエ・ダルサラーム州はインドネシアのスマトラ島の北部にあり、19世紀後半から20世紀初頭のオランダとの独立戦争でも知られる。2004年末のスマトラ島沖地震では最も大きな被害を受けた

インドネシアのアチエでは、30年にわたる政府軍とアチエ独立派「独立アチエ運動」(GAM)との紛争が2005年に停戦。信頼回復と将来の紛争再発を防ぎ、子どもたちの精神的な回復を目的に、ジャパンファウンデーションでは、07年に「アチエの子どもたちと創る演劇ワークショップ」を実施。08年8月にはそのフォローアップ事業として、「アチエ子ども会議」を5日間 にわたって開催した。その模様をレポートする。



「アチエ子ども会議」に参加したアチエの中高生と、日本とインドネシアのスタッフ。前回のワークショップ以来、信頼関係を築いた地元のNGO「コミュニティカール・バンドン」とともにアチエ内陸のタケゴン（参加児童の出身地の一つ）で実施した

## 緑

の水田にはさまれた幹線道路を飛ばし、曲がりくねった山道を越えワゴン車は走る。アチエ（ナングロ・アチエ・ダルサラーム州）の州都バンドアチエを発つて8時間。ようやく中部アチエ、タケゴンの湖のほとりに立つホテルに着いた。すでにあたりは暗い。高地なので、赤道に近いとはいえ、長袖でないと肌寒いくらいだ。

荷物をおろすと、早速、すでに到着している子どもたちに会いにいった。男の子たちは積極的に、「ぼくのこと覚えてる？」と声をかけてくれる。ずいぶん身長が伸びている。女の子たちは、すこし離れて笑顔を見せている。男の子より一段と大人びている子もいる。

07年4月のワークショップを終えてから1年半。当然ながら、どの子どもも大きく成長していて、その変化にちよつと戸惑うくらいだ。さあ、明日から4泊5日の「アチエ子ども会議」のワークショップが始まる。  
子どもたちはワークショップで初めての地図づくりに挑んだ

翌朝、水辺で、グループ分けを兼ねたコミュニケーション・ゲームをする。同じ地域から来た子同士ががたまりがちで、みんなまだぎこちなかったが、



〈上〉子どもたちがつくった自分たちの村の地図  
 〈左上〉子どもたちは近くのトウェレン村をフィールドワーク。  
 地図を描くために必要な情報を村人にインタビューして集めた  
 〈左下〉地図を手に発表を行なう子どもたち

出身地域混合で4チームに分かれ、「天と地」「コブラ」「葉っぱ」「黒と白」とチーム名を決める。

さあ、いざフィールドワークへ！案内役は地元で劇団を運営するアントン・キティン。ふだんは気のいいおじさんという印象だが、歌うと俄然カッコいい。彼が、地元の協力をとりつけ、見事にワークシヨップを支えてくれた。

最初の課題は、近くのトウェレン村をフィールドに、村を概観する地図を描き、グループごとに観察およびインタビューをして集めた情報を地図上にまとめる作業。子どもたちはさつと村に散った。絵の得意なラムやサラフデインは、村を歩きながら道やモスクなどをスケッチして地図の下絵を描いている。途中「これでいい？」と見せてくれた。

実は、彼らは、身近な地方単位の地図を見たことがない。アトラスと呼ばれる世界地図や国単位の広域の地図は学習するが、町や村単位の地図は、一般には手に入りやすく、学ぶ機会もないという。それにしてもよく描けている。地元出身のウイルダニは、初対面の村の女性に果敢にインタビュー。日陰に座ってメモをとりながら、じつ

り話を聞いていた。

村には花が咲き、特産のコーヒーが天日干しされている。だんだん日差しが強くなってきたので、早めに切り上げ、地図上にまとめる作業に取りかかる。調査項目などの細かい指定はしなかったのだが、子どもたちは人口、産業、インフラ、教育環境等々、予想を超える範囲で観察とインタビューを行ない、初歩的な社会調査といえる成果が得られた。改めて彼らの意欲の高さと、潜在的な力を確信する。

**地図には生まれ育った環境の違いがくつきりと表れた**

ホテルへの帰り道、こんなこともあった。村に一軒も店がないというS村からやってきた女の子たちが買い物したいという。そこで、予定を変更して市場に立ち寄ることにした。屋台を少し大きくしたような木造の店舗が雑然と並ぶ市場に、彼女たちは目を輝かせ、付添いのNGOスタッフのイスマエルと一緒に、どんどん奥に入っていく。北アチエから来ているアティは、歯磨き粉を忘れたと言って、地元のリッキーの案内で大きなチューブを買ってきた。突然としゃぶりの雨が降り出した。屋根に張ったビニールシートから大量

## 「アチェ子ども会議」とは

「アチェ子ども会議」のはじまりは、アチェの紛争被害に遭った経験を持つ中高校生を募って2007年4月に実施された「アチェの子どもたちと創る演劇ワークショップ」にさかのぼる。

この事業は、インドネシア政府軍とアチェ独立派「独立アチェ運動」(GAM)の30年にわたる紛争の停戦後の信頼回復と将来の紛争再発を防ぐために、未来を担う若い世代のエンパワーメントと精神的な回復を目指して、日本とアチェの芸術家やNGOの協力を得て行なわれた。

30名の参加者は演劇や詩作など芸術を通じて自分を表現するセッションのあとに、グループに分かれて「アチェの未来」をテーマに演劇作品をつくり上げた(当初は紛争経験をテーマに取り上げる予定だったが、予想以上に、彼らの心理状態が不安定だったため、中止した)。演劇の創作活動を通じて、「自身の感情を表現する」「他人の意見を尊重する」「多様な意見があることを受け止める」「共同で作業を行なう」などを学んだ。

そして、今回08年8月、前回の参加者のフォローアップを目的として、「アチェ子ども会議」が実施された。今回は09年にこれまでのメンバーを対象としたファシリテーター研修と、新たな参加者を募ってのワークショップが実施される予定である。



「カメラ」というシアターゲームでポーズをとる女の子たち。すっかりリラックスして、のびのびしている

の雨水が流れ落ち、通路が水浸しになっていく。そこへ、雨宿りをしに、元の少女がふたり走ってきた。ジルバブ(ムスリムの女性が着用するスカーフ)は被っているが、ピツタリとしたスバツツのようなズボンを履いて、流行のおしゃれをしている。足の線が出るセクシーともいえる服装の少女たち。

同世代のアティやズルが、おどろいたように彼女たちを見る。その視線は、少し咎めるようでもあり、どこか魅かれるようでもある複雑な色合いを帯びている。目が離せなくなっていると、地元

の少女は、なに見ているの、とでも言いたげな一瞥を残して通りを渡っていった。

翌日、自分たちの村の手書きの地図を見ながら、それぞれの地域の過去、現在、未来をテーマとして短い詩を書く。前回、初めて山奥の村を離れ、不安でいっぱい、自信がなくなるとおど

### 子どもたちは地図と詩の発表を通して紛争被害の記憶を語りはじめた

夜も作業を続行し、昼間の経験を手がかりに、今度は自分たちの村の地図を描いた。町場のタケゴンや近隣のブナール・ムリア県のX村、水田とエビの養殖池のM村(北アチェ)、大きな道は1本だけのS村(ピディ恩)。それぞれの地図には、彼らの生まれ育った環境の違いがくつきりと表れていた。

していたS村の女の子たち。帰りたい、でもやっぱり帰らない、と心が揺れ続けた。その子たちが、見違えるように落ち着いて作業に集中している。お節介気味の引率者の介入にもあまり動じなくなつて、とてもたくましく見える。

X村地域の発表のときのことだ。隣のタケゴンに住むアールが、「X村は今も道路が悪いというが、それは住民が税金を払っていないからじゃないか」と、揶揄するような口調で質問した。アールは、大人たちの政治談議を聞きかじり、地方の政情に通じてきているらしい。発表者のバフティアールはやや気色ばんで、「そんなことは絶対にな」と反論した。

次に、M村のサラフディンが質問した。サラフディンは兄弟が紛争時に拷問を受け、今も後遺症に苦しんでいるという。「紛争被害にあったというが、ほんとうに紛争のことを知ってるんですか」。口調は穏やかだが、厳しい質問だ。

するとバフティアールは、自分の父親が国軍の兵士に殴られて入院しなければならなかったことなどを、切々と話し始めた。バフティアールは感受性が鋭く感情表現が豊かな子だ。涙を流

## 私たちのカンブン

紛争：

アチェで紛争が起こったとき、  
私のカンブンの人たちは  
どんなに苦しかったことか  
そのとき私の村は本当にとても悲しかった  
なぜなら私たちの親は  
どこにもいけなかったから  
そして私たちはどんなに苦しかったことか  
白いご飯は食べられず  
食べられたのはゆでたイモだけだった

現在：

私たちはそんな紛争が  
もう繰り返されたいことを心から望みます  
そして将来、公平な指導者が  
人々を守ってくれますように望みます

将来：

そして権力者が今の道がととても乏しい  
私のカンブンを気遣ってくれることを  
とても望んでいます  
そして能力に見合った仕事が  
与えられますように  
私たちのカンブンの悲しい運命  
道路でさえよい状態ではない……！  
用水路もなく、  
農民は満足いく収穫を得たことがない  
養殖場に行っても  
十分な餌がないため収穫がない  
だから今、人々は養殖場に行っても  
満足いく収穫が得られない  
だから私たちはアチェの指導者に対して  
直ちにアチェの人々に  
手を差し伸べてくれるよう願う  
アチェが平和の意味を  
知るためにも……！

前日につくった地図をもとに、村の過去・現在・未来をテーマに、一人ひとりに詩を書いてもらい、それをグループでまとめて、グループの詩として完成させた。インドネシアでは伝統的に詩の創作や朗誦がさかんなので、子どもたちも生き生きと取り組んだ

しながらも、感情が溢れそうになると、地図に戻って具体的な位置を指し示したりして、自分を立て直しながら話し続けた。

彼の話が口火を切る形で、M村の発表では、今度はフアドの話が止まらなくなつた。村で起こった銃撃戦のこと、子どもを殴られ、精神的にダメージを受けて言動がおかしくなっていた村のおじさんが拷問されたこと。次々に具体的な師団や士官の名前を挙げ、彼らがどちらの方向から村に入ってきて、どちらの方向に抜けて行ったか、などを地図上で示しながら、溢れるように話し続けた。私たちスタッフは、あつ

文化活動を通じて敵対的な感情を超え  
地域復興の担い手を養成する

村の過去のことも詩にしてほしいという課題は出したが、これほど詳細、具体的に彼らの経験した紛争の記憶が語られるとは、正直思っていなかった。過去に触れるとパニックを起こすかもしれないという不安もあった。しかし、彼らは地図と詩を支えに、自分たちの経験を、おそらく初めて、他地域の人もいるなかで、具体的に語ってくれた。

地図は、話し手の記憶を鮮明に呼び起こし、聞き手には具体的な場所や方向などをイメージしやすくした。また、バフティアールの場合にみられたように、感情に飲み込まれそうになつたと

きに、聞き手から地図に視線を移すことで、感情を静めて気持ちを立て直し、話題を次に展開させることができるなど、語りの助けとなつた。

紛争被害は、独立派の独立アチェ運動（GAM）の拠点に近い地域でも、国軍の駐屯地がある地域でも、子どもたちに容赦なくふりかかっていた。子どもたちは誰もが被害者だった。その事実を、各地から集まった子どもたち全員で共有できたことは、とても意義深い。というのも、アチェには依然として国軍とGAMをめぐるしこりやわだかまりがある。津波による被害も完全には癒えていない。若い彼らこそが、経験を共有して、敵対的な感情を超えて、地域を復興する新しい担い手のひとりになつてほしいからだ。

このワークショップのねらいは、文化的な活動を通じて紛争のサイクルを断ち切り、内戦で傷んだ地域の復興を担う文化的なリーダーを養成して、少しでも地域に貢献することだ。そのためにも、子どもたちが芸術や文化的な活動の持つ力や効果を実感すること、そして地域の人たちの理解を得る必要がある。4日目の文化祭は、そのような目的で催された。



↑村長（右から2人目）の説得にもかかわらず、父親たち（村長の両脇）はなかなか子どもたちの交際を認めようとしな  
→バタック人とガヨ人の若いカップルは、異民族との交際を認めようとしな両親の反対にあって思い悩む



### 創作劇のハッピーエンドの結末に 子どもたちは希望を込めた

3日目の夕方から、進行は子どもたちに委ねられ、文化祭の準備が始まった。子どもたちは、昨年の経験を踏まえて、プログラムを決めていった。地元で練習を重ねている歌や踊りも含め、8つの演目を盛り込むことになった。新作は、今回つくった詩と演劇。演劇は、タケゴンの子どもたちが、アイデアを持って来ていたようだ。

バタック人とガヨ人、民族の違う若い2人が、親に交際を反対されている。なんとか説得しようとするが、とうとう父親同士の喧嘩沙汰に発展してしまふ。村長に和解するように説得されても、まだ納得しない。そこへ女の子の祖父がやってきて父を説き伏せ、男の子の家族を訪ねて謝罪。ようやく和解して、交際が認められる、という物語。わずか1日半で、即興的にセリフを考えながら場面をつくった彼らの力量は、驚くべきものだ。のびのびと演じていて、ユーモアもあり、グッと心に響くせりふもあり、雨の中、見にきてくださった地域の人たちも大いに沸いた。

思春期の彼らの最大関心事、恋愛を中心に、子どもたちが自由につく

った演劇。そこには、アチエ社会の現状が色濃く反映されていた。対立をかえながらも異民族が共存している状況、村長や警備員など村を構成し支える人たち、祖父母も含めた異世代間の交流。ハッピーエンドの結末には、彼らのメッセージや願いが込められているように思われた。直接的な利害関係に縛られがちな親世代には、さまざまにこだわりやしこりがある。しかし、若者は、知恵を蓄えた老人の助けも借りて、これまでの対立関係を超えていけるはずだ、そこに希望がある、と。

S村の女の子たちは、この演劇には参加しなかったが、そのかわり、ワークショップでつくった詩を朗読した。やや緊張気味ながら大健闘。舞台での立ち居振る舞いも、声も、前回とはくらべものにならない。とくに、前回、ほとんど声を聞けなかったファディーラ。消え入りそうな声だったあの子が、堂々と舞台上で詩を朗読するなんて！思わず涙がこぼれた。



はなさき せつ ●劇団黒  
テントを経て、公演活動  
とともに、ワークショップ  
の企画、進行を手がける。  
子ども、障害者、女性  
性の活動に力を入れている。  
現在、(企)演劇デザ  
インギルドの専務理事。  
日本大学芸術学部、  
武蔵野美術大学非常勤講  
師。世田谷パブリックシ  
アターのワークショップ  
の企画進行も担当